

わが若狭小浜

雨海博洋

東京に久しぶりに大雪が降った。真白に雪化粧をした景色をながめていると、雪にとざされた北陸の冬を思い出す。私はかつて、二年ほど富山に住んだことがあるが、今、目の前に浮かぶのは、まだ見ぬ小浜の冬景色だ。まるで、故郷の如く慕われるのは、八木崎雅興∨という人物への敬愛の念からである。

昨年五月に、十年来の仕事を完成させて、『大和物語語注集成』を出版した。室町時代以来の『大和物語』の諸注釈書をまとめたものである。その数ある注釈書の中でも、異彩を放っているのが『大和物語虚静抄』で、その作者が八木崎雅興∨、若狭小浜の歌人である。北村季吟の『大和物語拾穂抄』に、まさるとも劣らぬ内容を持ち、特に、和歌に関しては内外の古籍の引用傍証には

目をみはるものがある。こうしたすばらしい書でありながら、その作者八木崎雅興∨については、如何なる人物なのか、皆目不明であった。そこで「若州小浜 木崎雅興」と端書にある名を手がかりに、未知の世界への探求に乗り出したのである。その結果、木崎家系譜と、木崎家の菩提寺本行寺の過去帳との照合によって、法名宗青、通称吉兵衛なる人物であることが判明した。

木崎家の先祖は、江州観音寺山城主々々木六角定頼の二男常珍が、一五七〇年に世乱を避けて若狭の木崎村に移ったのに始まる。その後、三代目宗意の時に小浜に出て、初めて木崎姓を名告るようになった。やがて、多くの分家、末流が生じたが、雅興の家系は、代々酒造を営み、名望家として豪富威勢大いに鳴り響き、藩侯の御前にも召されることがあったほどである。

小浜は京との中継地としての港町で、富有な人々は、京の文化を取り入れ、連歌師・歌人・茶人などの京の宗匠との交流もあった。このような文化隆盛の中に、雅興の大叔父木崎正敏の『拾穂雑話』、二歳先輩の板屋一助の『稚狭考』の二大郷土誌が編まれている。雅興が歌の師と仰いだのは梅月堂宣阿で、宣阿は北村季吟とは同門の士である。雅興は、季吟の『大和物語拾穂抄』のことを聞き知って、その影響を受けた。そして、和歌の初めの書として『大和物語』を読み、詳細な注釈を加えた。京から山一つ越えた北陸の海辺で、華やかな学問の世界を離れて、こつこつと四十五年もの歳月をかけて『虚静抄』を完成させたのである。『虚静抄』という書名は、『莊子』に見える「虚静」で、「虚」は心に先入観をもたないこと、「静」は独断・衝動などによって

妄動しないことをいう。その名の如く、学
界への野心もなく、淡々と学究に専念した
人であった。そして、町老として町政の要
職にある一方、郷土の子弟に和歌を教え、
『大和物語』を講じたようである。

私が、今回、この八木崎雅興について
論証するにあたっては、多くの貴重な資料
によるところが大きい。木崎家系譜や、過
去帳を入手できたのは、まことに幸運なこ
とであった。これらの資料の入手には、
小浜出身の学生が、帰省の際に骨をおつて
くれた。教育委員会や図書館をまわって、
これだけのものを集めて来てくれたのであ
る。今まで、何人かの人々が雅興について調
べようと小浜へ足を運んでいるらしいが、
ここまでの資料を入手できた者はなかつ
た。私自身は東京にありながら、こうして
届けられた資料をもとに考証したことが、
よけい、まだ見ぬ小浜への郷愁の念をかり
たてているのだらう。また、雅興の『虚静
抄』という書名にみる人柄に心ひかれてい
るのかも知れない。小浜に、木崎荘という、
老人が営む小さな旅館がある。その老人は

木崎家の末裔であると聞き、また、直接会っ
て先祖のことなどいろいろ語りたいとの
便りもいただいている。これまた、小浜へ心
ひかれることの一つである。その上、小浜
の地でも、雅興について何かわかればと求
められていれば、なおさらのことである。

嬉しいことに、今回、大学の三年生がゼ
ミ旅行にこの小浜を選んでくれた。私の小
浜、そして雅興への憧憬の念を察してくれ
たのであらう。本行寺の残された雅興の墓
碑へ詣でて、その偉業とゆかしき人徳を賛
えるとともに、今回の研究を心をこめて報
告したいと考えている。

今まで縁もなかつた小浜が不思議と近く
親しく感じられる。これは小浜という場所
と木崎雅興という、自然と人事の結びつき
からである。

ここでふと思ひ出すのが『風物誌』の講
義の初めに、必ず引用する『去来抄』の中
の芭蕉の句である。

行春を近江の人とをしみける

この句に対して尚白が、「近江は丹波にも、

行春は行蔵にも」いいかえることが出来よ
うと非難した。これに対して去来が、近江
国は「湖水濛朧として春ををしむに便有べ
し」と尚白の非難を退ける。芭蕉は「しか
り、古人も此国に春を愛する事、おさく
都におとらざるものを」と去来の言を肯定
し、更に、近江国にまつわる史的背景をも
つてきて、この句の奥深さを示している。

まさに春が去ろうとしている近江の湖畔の
愁いと、かつて、つかの間の春を惜しんだ
近江朝の人々の悲しい歴史とが一体となっ
て、一段と春愁を抱かせるのである。自然と
人間とのかもし出したものが風土で、この
風土の姿を季節の折々にとらえるのが『風
物誌』である。これは、原子朗教授が命名
して下さった講義であった。

爾来十五年、いろいろと工夫を重ね、実
生活中心の講義を続けてきた。昨年、
この思ひ出深い講義を千葉講師にお譲りし
た。この辺で新風を吹き込んでもらいたい
と思つたからである。これからも『風物
誌』の講義が長く継承されてゆくことをせ
つに望んでいる。